久米田池について

44期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

久米田池というのは私の家の近くにある大きな池である。周りには久米田寺、久米田古墳群といったものもあり、幼い頃からなじみ深い。だが、意外にもこれらについて私はよく知っておらず、なぜ池ができたのか、周りの寺や古墳は池と関連しているのか、疑問に思いこのテーマを設定した。

Ⅱ　研究方法

(1)　文献調査　　岸和田市立図書館や久米田寺などへ行き、文献を集める。

(2)　現地調査　　実際に自分で足を運び、久米田池周辺を探る。（主に久米田池、久米田寺、久米田古墳群）

Ⅲ　研究内容

1　久米田池（くめだいけ）

(1)　概要

岸和田市池尻町から岡山町にまたがる池。周囲約4㎞（1里2丁）、面積46.8ha、灌漑面積3.6㎢。和泉地方においては従来最大の池であった。

(2)　歴史

この地方は元来水利に乏しいので聖武天皇が橘諸兄（たちばなのもろえ）と僧行基（ぎょうき）の二人に、池を掘るよう命じた。神亀2年（725年）に工事を起こし、13年の歳月をかけて天平10年（738年）7月に漸く完成した。その後聖武天皇は光明皇后と共に文武百官を率いて行幸せられたという。

▲図1　久米田池周辺地図

しかし、図2にもあるように行基の書いた『縁起』には、どのようにして池を掘ったか、どのくらいの労力がいったかなどは示されていなかった。だが、『久米田池の主』という昔話によると、やはり農民が主になり、一日にのべ千人余りが人夫となって工事を進めていったようである。また、どのようにして掘ったかは文献で探すことができなかったが、祖母の話によると、もともと川だったところを掘ってゆき、余ってしまった土を積み上げて小さな山にしたらしい。実際その山は「赤山」と呼ばれ（土が赤っぽいからだが）久米田池のすぐ側にある。その山からは人骨も発見されており、久米田池を掘る際亡くなった人々のものだと言われている。

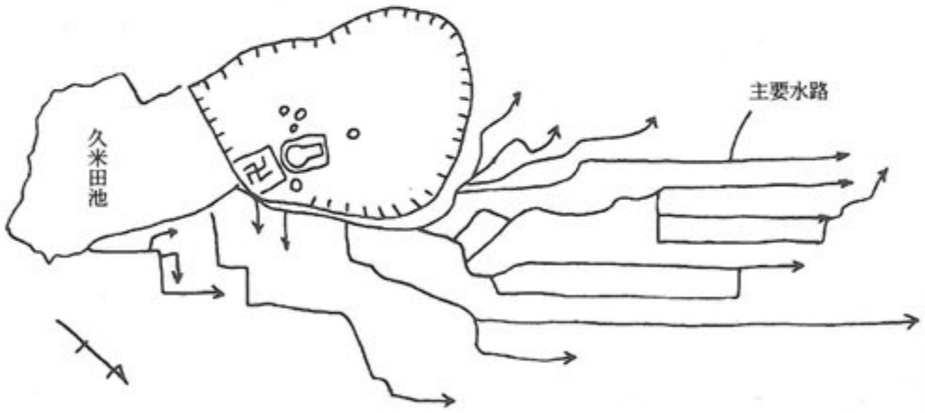
古代から久米田池の管理は久米田寺が行っており、鎌倉後期には二度堤の修繕が行われた。戦国期動乱によって寺が衰退した後、灌漑地域12ケ村で池郷を結成する。元亀3年（1572年）には尾生と池郷の争論があり、松浦肥前守が調停したという。その後天明4年（1784年）には池郷から岸和田藩に『久米田池古法古格之覚』が提出され、その中で池郷12ケ村のうち一番樋掛り七ケ村、二番樋掛り四ケ村、三番樋掛り田治米村としたらしい。現在では池郷を改組し、土地改良法に基いて「久米田池土地改良区」が発足されている。

堅牢地神は、黄牛に現じて塊を曳き、日月星辰は白人に示して堤を固ふし、大聖老人は、鷲峰海會の土を運んでこゝに築き、善哉童子は、清涼山堀の懐を荷うてこれに加へられた。…「縁起」

▲図2　「縁起」

(3)　水利関係

もともとこの辺りは台地にはさまれた荒地で大きな川もなかったようである。確かに私の家の周りにはたくさんため池があり、農業用水として利用されている。現在は久米田池より南側の地域は近くのため池から、北側の地域は久米田池から水をひいている。



▲図3　久米田池周辺水利関係

2　久米田寺（くめだじ）

(1)　概要

久米田池畔にある寺。龍臥山隆池院久米田寺と称し、高野山真言宗である。久米田池を掘った僧行基によって天平6年（734年）に開かれた。

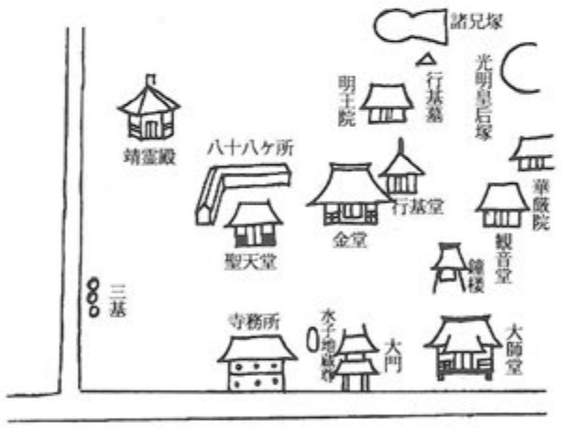
(2)　歴史

天平6年聖武天皇の勅願により、橘諸兄を大檀那として行基が開く。おそらく、久米田池の管理保全上必要だったものと考えられる。聖武天皇は光明皇后と共に文武百官を率いて行幸せられ、当時を勅願寺に定められた。これより平安時代にかけて、学問の寺として栄えた。

しかし、平安末期から鎌倉時代にかけて大動乱の影響を受け、当寺は荒廃していく。後鳥羽上皇や幕府の力を借りても退廃の勢いは止まらなかった。この頃和泉地方を領有していた安東蓮聖は、由緒する当寺の荒廃ぶりを嘆き、北条時頼の許を得ると一族をあげて再営修復に力を注ぐ。そうして真言宗の同情として再び栄えることになり、これより室町時代にかけて二百数十年間再盛期を迎えた。

ところが戦国時代に入ると、1560年から始まった三好実休、畠山高正の争乱、織田信長の河内・和泉諸寺院への侵攻等、相次ぐ災難に見舞われる。だが、1675年にほとんど再興した。現在の堂舎は大部分、この頃に建立されたものである。

(3)　境内



▲図4　久米田寺境内

①行基堂（開山堂）

久米田寺を開いた行基菩薩をまつっている。毎年十月十日になると、だんぢり12台が久米田寺へ行き開山堂を詣でる。これを「行基まいり」といい、年に一度お堂の厨子が開帳されて人々は行基像ぬかずくらしい。だんぢり祭りはもともと米の豊作を祝ったものであるから、行基が久米田池をつくったということは偉大なことなのであろう。

②行基墓

ちょうど久米田寺の端に行基の墓がある。墓といっても、ただ大きな石が置かれており、その周りを囲っているだけなのであるが……。周辺は墓地で非常に寂しいところである。（図5参照）

※境内には他にもいろいろな建物があるが、久米田池と関連しているのはこの

二つであった。

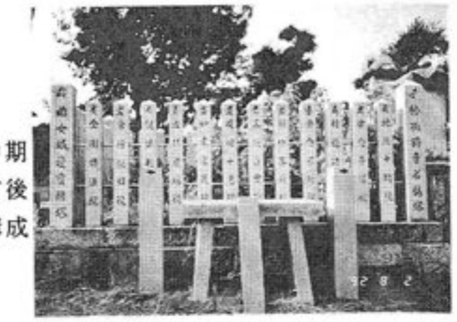
3　久米田古墳群（くめだこふんぐん）

(1)　概要

岸和田市池尻町周辺にある古墳前期～中期の古墳群。久米田丘陵の西側にあり、前方後古墳１・帆立貝式古墳１・円墳12以上で構成されている。

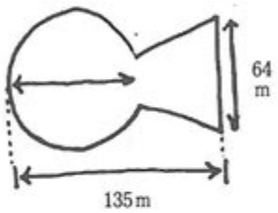
前方後円墳→久米田貝吹山古墳

帆立貝式古墳→風吹山古墳



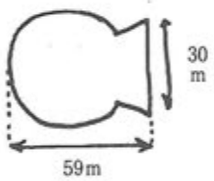
▲図５　行基墓

(2)　久米田貝吹山古墳



久米田寺開創の大壇那、橘諸兄公の墓で一般に「諸兄塚」と呼んでいる。しかし、もっと古い時代のものではないかとも言われ主ははっきりわかっていない。1560年から始まった三好実休、畠山高正の争乱－久米田合戦－の時、三好実休が城に使ったと伝えられており陣貝をここで吹いた為、貝吹山という名が付けられた。周囲には堀がめぐらされ、また松の木が植えられており景観のよいところである。（図７参照）

(3)　風吹山古墳



帆立貝式という非常に珍しい墳墓。周濠を持つ円墳としていったん完成させ、後に方形の前方部を付け加えて帆立貝式にしたらしい。大和王権下で円墳しか造れなかった地方首長が、埋葬の時点で身分が上がり前方後円墳に近い帆立貝式古墳の築造を認められた、と見られる。（朝日新聞1992年９月３日㈭朝刊第１面より）

(4)　光明皇后塚

光明皇后の円爪、御髪の一部が葬られている。円墳で直径10ｍ程。

▲図７　光明皇后塚

▲図６　久米田貝吹山古墳

※久米田池と直接関係していたのは、久米田貝吹山古墳と光明皇后塚の二つであった。

4　主要人物について

(1)　行基（ぎょうき）

668～749年。奈良時代の僧で和泉国大鳥群に生まれる。父は才智という名の帰化人で百済王の子孫であり、母は蜂田の首（おびと）虎身の長女、古爾比売である。彼はわずか十五歳で出家し、様々な所を歩いて人のためにつくした。彼の残した社会福祉事業は架橋６・直道１・池15・溝７・堀４　布施屋（無料宿泊所）９・僧尼院49と、非常に数が多い。何がこれ程まで彼を動かせたのか。これには母の死が関係しているらしい。四十二歳の時、母親が死んでから彼の活動はさらに盛んになったという。おそらく母親の死に対する悲しみから来たものであろう。

717年、大宝の僧尼令に違反するものとして行動を禁止させられる。だが、彼は再び活動を始め、725年山崎橋を架ける。そのうち彼の行動にはめざましいものがあった為、朝廷も彼を認め、743年聖武天皇発願の毘盧遮那仏（るびしゃなぶつ・大仏のこと）造立を彼に依頼する。大仏が完成するまでに亡くなったものの、彼の功績は偉大なものとして、彼の死後大菩薩の号が授けられた。

(2)　橘諸兄（たちばなのもろえ）

684～757年。奈良時代の官吏。敏達天皇の五世の孫。父は治部卿摂津夫従四位下美努王（みぬのおおきみ）で母は県犬養三千代（あがたのいぬかいみちよ）という。光明皇后とは異父兄妹。（図８参照）彼は藤原政権と対立していた。737年、彼は大納言に昇進するが、藤原四子（武智麻呂、房前、宇合、麻呂）が疾病によって相次いで病死してしまう。よって彼は朝廷での権力を持つようになるのだが、いつの間にか実権は武智麻呂の息子、仲麻呂に移っていた。そこで彼は755年聖武天皇の病中、大伴氏、佐伯氏らと共に仲麻呂打倒を謀るが露顕して失敗に終わる。光明皇后の尽力で事は不問となったが、彼は756年余儀なく引退させられた。左大臣にまでなった諸兄も陰謀の失敗で朝廷からはじき飛ばされたのである。

▲図８　血縁関係

Ⅳ　結論

久米田池は水の乏しかったこの地域に、灌漑のため行基によって造られたものである。久米田寺は久米田池を管理するために当時建立されたのだが、行基の偉業は今日でも子孫に語り継がれ、行基堂、行基墓という形で残っている。彼だけではなく、大壇那の橘諸兄、光明皇后等にも感謝と尊敬の意をこめて墳墓がつくられたのである。そしてそれらが久米田古墳郡を形成している。同じ「久米田」という言葉がつくということからも想像できるが、やはり久米田池、久米田寺、久米田古墳郡の三つは密接な関係でつながっていると言えよう。

V　総括

今回の自由研究は現地調査などもしたが、結局は文献に頼ることになってしまった。だから、研究としてはあまり良くないものだと思う。でも、自分が本当に知りたかったことをテーマにし、そして好奇心を持って研究に取り組めたことを嬉しく思う。

・参考文献

・井野口志保ほか13名（1981）「久米田池の主」 子供のつくった民話本　10p
・岸和田市文化財保護専門委員（1961）「岸和田市の文化財Ｉ」 pp.51－54　岸和田市役所　81p
・市史編纂室（不明）「岸和田市古蹟名勝３　寺院址Ｉ」 岸和田市立図書館蔵書
・竹内理三（1983）「角川日本地名大辞典」 pp.439－440　角川書店
・藤原衛彦（1920）「日本伝説　和泉の巻」 pp.239－244　日本傳説叢書刊行会　314p
・その他 「久米田寺」「勅願寺　龍臥山久米田寺」等